# つながるコミュニティを再構築

## ～地域のプラットフォームに「つながる！松源寺」～

長野県小海町　池田　知美

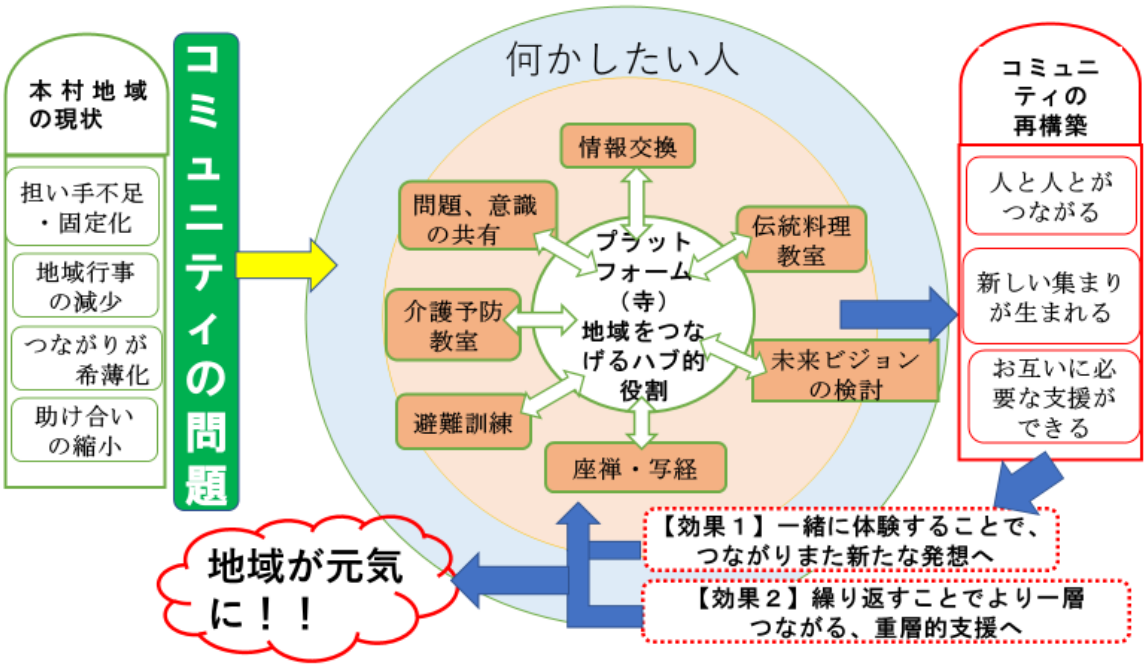
１．はじめに

全国的に少子高齢化、人口減少社会、核家族化が進み、地域の人間関係の希薄化が進んでいる。

筆者の暮らす小海町の本村地域でも、地域行事や道普請への参加者が年々減っている。このように地域の人が集まる機会が減り、住民が思うように活動できない状況にあることへの対策として、地域の人が集まることのできる場や機会を増やしていくことが必要だ。

本稿では、寺を活用して地域の人が気軽に集まれるようなプラットフォームを構築することを提言する。こうした提言を行う背景として、筆者は 13 年前にかろうじて行われていた寺主催のゴルフコンペで夫（現在、本村地域の「松源寺」の住職）と知り合い嫁いだが、このことから地域のつながりを実感するとともに地域の中で寺の機能が十分に果たされていないことに課題意識を抱き、地域と寺とのつながりを考察したいからである。

本村地域の課題とその状況にある理由及び課題解決策を整理すると、下図のとおりとなる。このように、地域に気軽に集える場をつくり、地域が一体となるコミュニティを再構築することで、下図に示したとおり人と人とがつながり、新しい集まりが生まれることとなる。そして、お互いに必要な支援ができることとなり地域が元気になることが期待される。



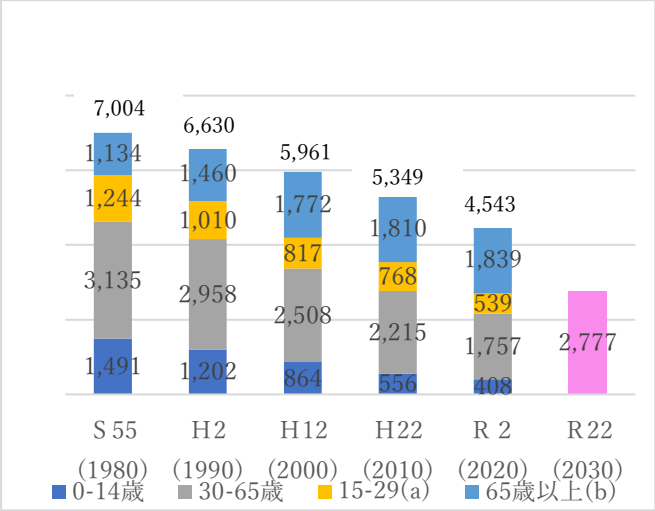

本村地域の現状と課題解決の方向性

２．小海町の現状と本村地域の果たす役割とコミュニティの現状と課題

（１）小海町の現状

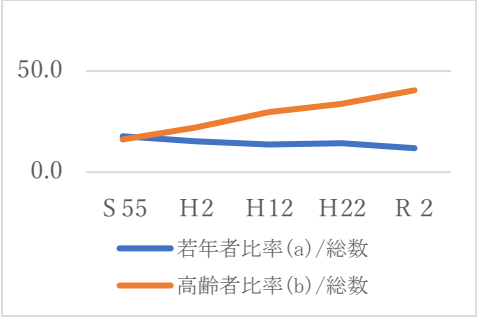
小海町は長野県の東部に位置している。

国勢調査によると小海町が発足した昭和30年の人口は9,605人であったが以降減少し続け、昭和 55 年には 7,004 人、令和 2 年には 4,543 人となり昭和 55 年から 40 年間で 2,461 人(35.1%)が減少している。さらに、令和 22 年には 2,777 人まで減少すると推計されている。




**小海町　人口の推移**

また、昭和 55 年には人口に対する小海町の若年者比率が高齢者比率を若干上回っていたが、それ以降は逆転している。小海町の人口を示すグラフから人口は 40 年前と比べ 6 割に、また 40 年前は人口に対する若年者率が高齢者率を若干上回っていたが、それ以降は大きく逆転していることがわかる。現在の小海町の高齢化率は 40.5%である。




**小海町　若年者・高齢者比率**

（２）本村地域の概要と地域の役割

本村地域は小海町の中心部から南東に 5 キロ程離れた山間に位置し、本村地域の中心を流れる相木川は流れが緩やかで、釣り人も多く川遊びも体験できる。また周りの紅葉は小海町のお宝 100 選にも選ばれている。

また、本村地域の高齢化率は 48.9%と小海町と同様、超高齢社会に突入している。本村地域も小海町の人口と同様の傾向がみられ平成 12 年から令和 2 年までで 57.1%減少している。小海町の 65 歳以上の要介護者の出現率は平成 29 年で 15.9%（国平均 18.1%、長野県 17.5%）であり、元気高齢者が多く高齢でも仕事や役割を持ち活動している。

本村地域（本村区）の現在の役割としては情報伝達、防災全般、インフラ整備、行事活動等を担っている。50 年前には地域に青年団の集まりがあり、区の夏祭りを主催したり小学生の夏休みに学習や遊びを一緒に行ったり、テレビのない時代には公民館で劇を披露したりなど、地域コミュニティの役割をも担っており、子ども達が次の青年団として活躍していくサイクルができていた。だが、人口減少とともに生活スタイルも変化し、徐々に青年団の活動は衰退し、現在は青年団としての活動は行っていない。これは一例で地域の婦人会や若妻会をはじめとするその他の集まりも、最近では老人クラブさえも衰退しつつある。

私の実家のある地域では子どもが回覧板を各家庭に持っていくと、お駄賃などとお菓子をもらったが、今はポストに入っているだけだ。近所に誰が住んでいて、どこへ行ったら

交流が持てるのか、特に嫁いだ身としては女性の集まりはあるのかなどを、誰に聞いたらいいのかと悩んでしまった。当初は地域の人を良く知らないこともあり、煩わしい関係がなく良かったと思ったが、寺の機能としてかつては寄合や交流の場だったことを思うと、地域のことをこのまま知らないままでいいのだろうかと考え始めた。地域の中で寺の機能が果たされていないことや、本村地域はどうやってつながっているのか不安に感じ、本村地域について考察することとした。

（２）本村地域における課題

本村地域（本村区）の課題を整理するため SWOT 分析を行った。

**本村地域の課題ＳＷＯＴ分析**

| | プラス面 | マイナス面 |
|---|---|---|
| 内部環境 | ○強み<br>・元気高齢者が多く、何かしたいと思っている人がいる<br>・家庭、仕事以外の人間関係を求めている人がいる<br>・相木川の資源（釣り、川遊び、風景）<br>・自然豊か | ○弱み<br>・少子高齢化<br>・区の役員の固定化<br>・区の行事の簡略化<br>・空き家の増加<br>・若い世代は子ども中心の生活<br>・核家族化で世代間交流がない<br>・交流したくても集まる場所がない<br>・コミュニティの衰退 |
| 外部環境 | ○機会<br>・田園回帰の動き<br>・空き家活用 | ○脅威<br>・人口減少<br>・大雪、災害→支援の必要な人がいる<br>・コロナ |

これらのことから、区の役員が固定化され、1 人の負担が大きいこと、行事への参加者が少ないこと、参加者が少ないため行事が縮小化、簡略化され子どもの思い出となる行事が減っていることが弱みとして整理される。そして、それらの弱みの根本には、交流したくても人が集まる場所がなく、仲間同士のつながりがないためコミュニティが成り立っていないという課題が存在する。

そこで、次章では、参考事例である「三田の家」をもとに本村地域の理想の姿について検討したい。

３．地域住民と共に考えるコミュニティ

（１）「三田の家」の事例から

三田の家は 2005 年に東京都港区に設立された。2002 年より構想があり、慶応義塾大学教授や学生と三田商店街振興組合との話し合いからお互いに空き家を拠点として活動を始めることになった。それが三田の家である。大学の地域連携活動の拠点、地域の商店街や大学関係者の会合が行われる会議室や、喫茶や酒宴が営まれるカフェ、勉強部屋、休憩室などのどれでもあり、どれでもない場所として活用されてきた。2010 年に家屋の権利関係の都合により閉じられたが、その理念は芝の家に受け継がれている。その活動の記録は「黒

板とワイン　もう一つの学び場『三田の家』」にまとめられた。同書には「場自体の機能を明示しなくてもそこには淡い意味作用が生まれる」「名前と機能が合致していないことで訪れる人の解釈は自由」「『家』なのに誰も住んでいない、教室にも居酒屋にもなりえて固定されることがない。矛盾を活かすためには空間的なデザインにも配慮が必要」とされている。「『原っぱ』のようにプログラムのない場は、自然に形成される」とも述べられている。

このように、目的を限定せず集まれる場が、1 人ひとりが出会い関係を築くことができる場となる。

**本村地域の課題の整理**

| 本村地域の課題 | 理由 | 参考事例から（三田の家） | 本村地域への適用 |
|---|---|---|---|
| 人が集まらない | ・集まる場所がない。<br>・高齢者は集まりたいが、自宅では掃除、お茶の用意など大変。<br>・若い世代は「地縁」より学校、仕事など「目的」をもった集まりを重視している。 | ・集まる人が使い方のルールを持ち寄ることができる。<br>・集まる目的を限定しない。<br>・使う人の問題意識によって目的が顕在化する。 | ・人が集まるきっかけをつくる。<br>・気軽に自由に集まる場があれば人が集まる。<br>・集まることで目的が生まれる。<br>・集まった人同士のネットワークができる。 |
| 仲間同士のつながりがない | ・核家族化で世代間交流がない。<br>・地域に住んでいる人を知らないためつながりもない。 | ・場づくりは 1 人ではできない。<br>・集まった人がその場の意味を作る。<br>・人との出会いが変われば交友関係もワークスタイルも変わる。 | |

（2）プラットフォームとしての役割

総務省の地方制度調査会による「2040 年頃から逆算し顕在化する諸課題に対応するために必要な地方行政体制のあり方に関する答申」（以下「答申」という。）には、「地方部では一般的にコミュニティ意識は高く地縁による共助の支え合い体制の基盤が存在する地域が多い。(中略)他方で担い手の減少により共助の支え合い体制の基盤が弱体化しつつあり(中略)地域の多様な住民に開かれた取組にしていくと共に継続して活動していく上で(中略)組織的基盤を強化していくことが重要である」と示されている。

本村地域は婦人会、若妻会、老人クラブの活動が衰退していることから弱体化しているコミュニティであり、すでに共助の支え合い体制が弱体化している。区の活動も行事に集まる人が年々少なくなり、集まる人も固定化しているので地域にどんな人が住んでいるのか、お互いに知らない。令和元年東日本台風（台風第 19 号）の被災時、1 人暮らし世帯や高齢者世帯はとても心細い思いをしたと聞く。地域の中でお互いを知っていたらお互いに心配し合い、声掛けもできる。弱まったコミュニティをもう一度つなぎ直す必要がある。

前記答申には、「プラットフォームは地域の実情に応じ、自主的かつ多様な取り組みを基本として展開が図られるものであり（中略）それぞれの活動の自主性、自立性が充分に尊重されるべき」「プラットフォームは地域の未来予測を踏まえ地域資源・課題を見出し目指

す未来像の実現に向けた議論の場としていく」とも書かれている。この答申はプラットフォームのあるべき姿について書かれているがそもそも本村地域はプラットフォームを作ること、人と人がつがるところから始めなければならない。地域の未来予測は重要なことであるが、今の時点で本村地域の未来予測は人口減少と少子高齢化により将来的に地域の存続も厳しいと考えられる。人口が少なくても少子高齢化でもお互いに支え合い楽しく暮らせる地域を作るためにはプラットフォームで人とつながることが必要である。プラットフォームでつながることで、情報交換や、未来予測を踏まえた地域資源・課題を共有することができる。そこから目指す本村地域の未来像の実現に向けた議論ができる。

（３）課題を解決するためにみんなが集まれる場が必要

課題の整理から出てきた「集まれる場所」だが、高齢者への聞き取り調査からも「近所のお茶飲みが減った。集まるのに適当な場所がない」「老人クラブがなくなってつまらない」等の声があった。また地域を盛り上げたいと思っている人（子供に伝統料理を教えたい、ヨガを教えたい、介護予防教室をやりたいなど）がいることからも、集まる場所と集まるきっかけが必要だと考えられる。

４．みんなが集まれる場＝プラットフォームとしてのお寺の再活用

（１）本村地域のプラットフォームとして

本村地域の地域資源を考えたとき集まれる場として地域の公民館と寺が考えられる。公民館は常に人がいるわけではなく使うのに区の許可が必要だ。しかし寺ならば住職もいるし庫裡も庭も広い敷地が使える。寺の持つ独特の雰囲気は、普段の生活とは違う空間で護摩、写経など「非日常を過ごせる場」である。寺へ行き、非日常を過ごすことで日常を振り返り気づきが持てる。また近辺の寺ではジャズコンサートや利き酒を楽しむ会を行っているところもある。「寺は楽しむ非日常」を提供できる場でもある。

（２）寺の役割、昔と今

仏教の伝来は飛鳥時代と言われているが、本村地域にある松源寺は約 570 年前、室町時代に創建された。仏教の普及に伴い江戸時代に檀家制度が始まった。幕府が学問を奨励したため宗派ごとに学校が作られ寺小屋もできた。その後も寺が寄合の場、交流の場として活用された。そこで人と人とをつなげる「ハブ的役割」を果たしてきた。人が集まるから情報が集まる、情報が集まるからつなげることができた。

地域の方への聞き取り調査から、昭和時代後半まで松源寺で本校に通う小学生が一休みしたり、茶道教室、習字教室も行われたりしていたことが分かった。しかし、現在は葬式、法事、総代会、仏教婦人会などしか行われていない。葬式や法事もセレモニーホールで行うことが増え、それに伴い地域の人の足も遠のいている。「最近は用事（葬式・法事）のある時しかいかない」「行きにくい」という声も多い。このことから昔に比べ敷居が高いという意識や、寺の役割が固定化されているということがわかる。そのような中、町と区から災害時の避難場所として松源寺の庫裡を貸してほしい旨の申出があり三者で協定を結んだ。

①寺の現状と活用方法

寺の課題を整理するため SWOT 分析を行った。

**寺の課題ＳＷＯＴ分析**

| | プラス面 | マイナス面 |
|---|---|---|
| 内部環境 | ○強み<br>・広い敷地が自由に使える<br>・非日常を体験できる（護摩・座禅・写経）<br>・寺の特性を生かした集まりを考えられる<br>・自然豊か（湧き水、動物も出る、寺の風景）<br>・寺でイベントができる（肝試し、ヨガ）<br>・公共的な場である | ○弱み<br>・役割が決められている（葬式・法事）<br>・敷居が高い→集まりにくい、つながりにくい<br>・情報発信が少ない、寺のことをよく知らない。<br>・つなげる人がいない。<br>・寺がハブ的役割を果たせていない。<br>・住職が若くて心配。 |
| 外部環境 | ○機会<br>・元気高齢者が多く、集まる機会を求めている。<br>・つながりたいと思っている人がいる。<br>・地域の伝統や文化を大切に思っている人がいる。 | ○脅威<br>・檀家離れ<br>・住民は寺に関心がない。 |

これらのことから、寺の克服するべき点として、葬式、法事など役割が決められていること、敷居が高いこと、寺のことをよく知らないことなどの問題点と、集まる機会を求めている人や地域の人とつながりたいと思う人がいること、伝統文化を大切に思っている人がいることがわかる。

そこで、アルベルゴ・ディフーゾを参考に課題とその状況にある理由及び課題解決策を整理したい。

「アルベルゴ・ディフーゾ」とは、町全体を１つの分散型ホテルに見立て、町の中に点在している空き家をひとつの宿として活用し、町を丸ごと活性化しようというもので、観光･おもてなしの手法として注目されている。地域の廃屋や空き店舗をリノベーションし、レセプション、客室、食堂などの機能をそれぞれの棟に分散させることで、旅行客は自然と町を歩き、その土地の食や文化、人とのふれあいを楽しみながら滞在する。また、地域住民も、今存在している家、人、文化に配慮しながら一体となって旅行客をもてなすため、観光振興だけでなく、自分の住んでいる地域を大切にしようという思いにもつながる。

この事例は、地域が一体となり寺を生かしたプラットフォームの構築に参考になる。寺に人が集まることで情報が集まる。そこで住職がハブ的役割を果たすことで様々な情報が集積、整理される。そこから情報の流れや人の流れが生まれる。必要な人にそれを届けることで人と人がつながることとなる。また、地域の伝統文化、景観などの地域資源を大切にしている点、これは子どもたちに自分の故郷への愛着を育むことにもつながるであろう。

**プラットフォームとしての課題の整理**

| 寺の課題 | 理由 | 参考事例 | 寺への適用 |
|---|---|---|---|
| 仲間同士のつながりがない | ・集まりがないからつながらない。<br>・つなげる場やつなげる人がいない。 | ・村全体が１つのホテル、レセプションがそれぞれを繋げている。 | ・寺がハブ的役割を果たすことで地域がつながり、新しい集まりが生まれる。<br>・情報が集積、整理されることで必要な情報が必要としている人に届く。 |
| 文化・伝統を大切にする | ・人口減少、少子高齢化などで、区の伝統行事が簡略化されている。 | ・村全体で地域資源を大切にし、その維持のため一体化している | ・元気高齢者にお願いし地域の伝統文化、郷土料理などを教えてもらう。<br>・住んでいる人が地域を誇りに思い、地域への愛着が湧く |

次に、プラットフォームとしての寺のメリットと克服すべき点について述べたい。

②寺のメリット

・公共的な場所、役割があること

昔から寺は寄合の場、交流の場であり公共的な場であった。「住み開き」ではないが寺は様々な人が集うパブリックスペースとして活用することができる。広い境内も庫裡も誰がいつ来てもどのように使ってもいい場所である。そこで人と人とを繋げる「ハブ的役割」を果たしてきた。

・日常と非日常であること

寺に来て庭を散歩するだけでも自分の家でも公園でもない空気感があり、非日常の空間である。普段しないこと、例えば写経や座禅なども非日常である。本村の松源寺では毎月 28 日に「護摩」を行っている。これは供物を火に投げ入れて祈願するもので、供物とは護摩木のことだ。これを焼き尽くすことで煩悩が払われ、願いが叶うとされている。参加者は住職の他に僧侶が 2 人と 60 代、70 代の男女 5.6 人と 30 代の男性 1 人である。誰でも参加可能なのでその時々のメンバーは変わる。宗教的な参加でなくとも約 1 時間太鼓やお経と共に炎を見ていると、昔のことを思い出し、自分を振り返る時間になる。たった 1 時間、そこにいるだけだがとても豊かな時間を過ごすことができる。松源寺ではこのほかにお釈迦様の生誕を祝う「花祭り」と「節分会」を行っている。「花祭り」は町の保育園児を招待し行う。住職の話を聞き、お釈迦様に甘茶を掛け、自分達も甘茶を頂く行事である。「節分会」は年男年女が寺で護摩を焚き厄を落とす。その後豆まきをする行事だ。神聖なことを行う舞台ともなる寺は非日常の時間を過ごせる場である。日常から非日常にきた時、自分を振り返りリセットできる場である。

③寺の克服すべき点

聞き取り調査から「敷居が高い」「寺の役割が決められている（葬式・法事)」「住職が若くて心配」ということが分かった。「敷居が高い」「寺の役割が決められている」のは寺に行く機会が少なく、行くのも葬式・法事など用事があるときだけだからだ。用事がなくて

も行くようになれば、住職と住民がつながり、また別の来た人とつながることを繰り返すことで解消できる。「住職が若くて心配」は逆に捉えれば檀家さんからアドバイスを頂きやすい立場にもあるといえる。

（３）気軽に訪れてもらうために

・寺に人を呼ぶためのきっかけ作り

寺に用事がなくても行くきっかけを作る。寺近くの 30 軒ほどを訪問し、朝のラジオ体操へのお誘いをした。「行きたい」「なるべく行きたい」と答えた人は 14 人で 52%である。そのうち、80 代が 1 人で他はすべて 60 代、70 代である。時間に余裕のある元気高齢者は「足が悪いのでラジオ体操には行けないがお茶飲みには行きたい」「老人クラブがなくなってつまらないからお寺で代わりのことをしてほしい」「子どもに繭玉やまんじゅうづくりを教えたい」などの声が聞かれた。このことからみんなどこかでつながりたいと思っている、きっかけがあれば自分のできることをして地域とつながりたいという気持ちのあることがわかった。寺にも「お茶飲み」など人と集まる場としての期待を持っていることがわかる。

**ラジオ体操へのお誘い**

グラフの「行かない」「無回答」と答えた人は全体の 13 人、48%である。うち 30 代、40 代は 7 人で半数を占める。7 人全員が若い世代で「行かない」「無回答」のどちらかだった。子育て世帯をはじめとする若い世代は「仕事の前は忙しい」「良いことだとは思うが行かない」と集まることへ消極的だ。区の行事の参加者が少なく、固定化されているのは前述したとおりだが、若い世代は子どもの行事には参加するが、他の活動にはほとんど参加がない。これは生活スタイルの変化により「地縁」より職場や子どもの関係など「目的」を重視した仲間づくりや活動が多いからだ。

（４）プラットフォームとしての寺の取り組み

ラジオ体操をきっかけに集まった人への聞き取り調査から、どのような行事なら集まりやすいか以下のとおり整理した。

**どんな行事なら集まりやすいか**

| 行事 | 集まりやすさ |
|---|---|
| 繭玉<br>焼き芋大会 | 世代、性別関係なく集まりやすい |
| お茶のみ | 集まりやすい（子どもは積極的には参加しない） |
| ヨガ教室<br>体操教室 | 健康志向の高い人は集まりやすい |
| 書初め | 子どもは集まりやすい |
| 護摩<br>写経 | 興味のある人が多い（特に大人） |

以上から、護摩、座禅のように寺特有の行事への興味は高いこと、繭玉や焼き芋大会は世代、性別問わず集まりやすいこと、イベントを単独で開催するより、お茶のみなどの交流と組み合わせた方がより集まりやすいということがわかった。

聞き取り調査からは「子どもに繭玉を教えたいおばあちゃんが地域にいる」と話すとぜひ参加したいとの声があった。区の行事も「マスつかみ」など子ども向けの行事には集まる。このことからも地域の集まりには消極的でも、子どもに関する活動には興味があることがわかる。

調査をした全員が「写経や座禅をするなら行ってみたい」とのことだった。写経や座禅を寺という非日常の場で行うのは日常では経験できない時間を過ごせる。寺という独特な雰囲気の中で行うことで、自分を見つめなおすことができる。子どものことや仕事に追われる忙しい日常の中で自分自身をリセットする時間を、地域の人は求めているのではないだろうか。

また、親子、祖父母と３世代で集まりやすいのは繭玉作りのような行事である。このことから、ただ集まるのではなく、集まるきっかけと交流という要素があるとより集まりやすくなるだろう。２つをセットにすることでより効果的だと思われる。そこできっかけと交流を組み合わせる活動の企画をする人、すなわち「ハブ的役割」を果たす人の存在が必要になる。やりたい人なら誰でもその役割を担ってもいいが、最初は毎日寺にいる住職がその役目を担うこととする。そこで「つなげる！松源寺」として庫裡の玄関を開放しておく。玄関はコの字になっており、少し話をしたい時に靴を脱がなくてもそこで腰かけて話ができるようになっている。いつ来てもらってもいいが、住職が庭仕事の合間にお茶を飲むのでその時間を「つなげる！松源寺」とする。

寄った人はただお茶を飲みながらおしゃべりするだけでもいい。その時間を楽しく過ごせたらいいが、そこから新しい活動を望む声が聞かれるようになったら、一緒にイベントを考えて実行していく。

聞き取り調査からもやりたいことがある「プレイヤー」がいることは分かっているのでハブ的役割を果たす「マネージャー」として住職と筆者（寺の嫁）が当たる。

重要なのは、その「マネージャー」がアルベルゴ・ディフーゾのレセプションのような役割を果たし、本村地域のデータベースのように様々な情報を集積し、「この人に聞けば色々紹介してもらえる」などと必要な人へつなげることだ。

集まりやすい活動として寺で繭玉作りとお茶のみをセットで行うことについて考察してみる。

繭玉は養蚕の安全を祈って小正月に飾られた。現在では形式化したものが寺社の縁起物として売られているところもある。長野県では昔から養蚕が盛んだったこともあり、各家庭や保育園の行事で作られてきた。しかし、養蚕が衰退するとともに繭玉も作らなくなり、今の子ども達は繭玉を知らない。

そこで、子どもに繭玉作りを教えたい高齢者と、子どもの行事なら参加したいという子育て世代の３世代で繭玉作りを行う場を作ると、次のような効果が期待される。

繭玉を作る工程はすべて手作りであり、こねたり丸めたりと楽しい作業もあるが、蒸し

器を使い熱いものをこねるので子どもだけでは難しい。そこで、高齢者が繭玉の由来などを話しながらともに作ることで、本村地域の文化に触れることができる。

そして、繭玉を作った後はお茶飲みをすることで、集まった人同士が交流することができる。近所に住んでいながらほとんど会うこともなかった世代間の親睦を図れる。また、近所の人と直接話すことで、高齢者も生活に安心感が増す。

なお、告知の方法は口コミのほかに、寺には昔ながらの布教方法で伝道掲示板というものがある。これを布教活動ではなく寺のイベントの告知として使うことにする。松源寺では伝道掲示板は活用していなかったが、寺の玄関にホワイトボードで行事の案内をする。散歩で境内を通る高齢者が楽しみに見に来ることもあり、寺に行けば何かやっているという期待感も持てる。

さらに、最初は寺の呼びかけで始まったが、参加者から自発的に行事の提案が出てくると継続的な活動につながると期待できる。

## ５．おわりに

寺は地域のプラットフォームとしてどうあるべきか。第一に人が集まることと述べたが、寺は今第一歩を踏み出したところである。今回、人が集まることでつながりが生まれた。プラットフォーム（寺）に対して色々なニーズがあることも分かった。新しい目的をもった集まりがまた新しい人をつなげ、新しい集まりを生むことで活動が発展していく。個人や目的を持った団体、新しいコミュニティとネットワーク化を図ることで、支えあいに必要な情報が収集され、発信できる。地域の様々な取り組むべき課題をプラットフォームですべて解決できるわけではない。

たとえ少子高齢化が続くとしても、たとえ地域全体の人口減少が避けられないとしても本村地域のプラットフォームとしての寺を活用してお互いに支え合い、楽しく暮らせる地域づくりを進めて行きたい。

（参考文献）

○編著者　熊井敬聡　望月良一　長田進　板倉杏介　岡原正幸　手塚千鶴子　武山政直「黒板とワイン　もう一つの学び場『三田の家』」　株式会社太平印刷社　2010 年

○著者　飯盛義徳「地域づくりのプラットフォーム」　株式会社学芸出版社　2015 年

○アルベルゴ・ディフーゾ（https://albergo-diffuso-japan.jp/about）
最終閲覧日　2021 年 1 月 4 日

○総務省地方制度調査会による「2040 年頃から逆算し顕在化する諸課題に対応するために必要な地方行政体制のあり方に関する答申
（https://www.soumu.go.jp/main_content/000693733.pdf）
最終閲覧日　2020 年 12 月 28 日